『比較民俗研究』7．1993／3

研究ノート

蛙文化の発生
―その伝播論的一試論―

劉　福徳※

はじめに

日本の縄文時代中期の土器の上に蛙の文様がみられる。

その文様は普通，浮き彫りで，大部分が有孔鍔付土器についている。文様は変化に富み，一様ではないが，すべて蛙の姿の変形である。例えば，あるものは上肢が三本指に作られ，下肢は曲がり，中には環の形になっているのもある。蛙の頭は，あるものは球形に作られ，あるものは両眼が無限に誇張されて，二つの環のようになり，実際に把手（とって）としてつかえるようになっている。身体に背中は半円が二つ合わさったようになっていて，半円の中に一つずつ渦紋があり，それによってまた変形した三本指の人の形がある。即ち丸の形の「蛙」の腹の上には人面が作られており，肢体は曲がって変形している[1]。

このような文様の分布は中部，関東地方一帯に集中し，出土地点としては山梨県中原，御所前，上黒駒，一の沢西。長野県井戸尻，藤内。神奈川県林王子。東京都中山谷，南養寺。茨城県福田貝塚。埼玉県馬場小室山等の遺跡が知られている。

このような文様についての専門の研究者の研究論文は少なく，むしろ美術や神話関係の学者，研究者の興味を引いており，すでに，ネリー・ナウマン（Nelly Naumann, 1975）等の論述が知られている[2]。ネリーの論文では文様の意義や伝播関係については論じられたが，この文様に代表される文化の具体的な伝播関係や部族の移動との関係，問題の廣範性，文献の考訂などについてはもう一歩の論述が必要である。

※群馬大学教育学部研究生

一

蛙，或は蟾蜍は古代中国では月の象徴であった。

「淮南子・精神訓」に「日の中に三本足の烏あり，月の中に蟾蜍あり」とあり，また同書「覧冥訓」に「恒娥が月に身を托して蟾蜍となり，月の精となる」とある（「初学紀」より引用）。また「淮南子・説林訓」に「月は天下を照らすが蟾諸に蝕される」とある。「蟾諸」は蟾蜍のことで「蟾蠩」とも書く。

蟾蜍と月との関係については漢張衡の「霊憲」，「春秋緯演孔図」（「太平御覧」より引用）にも記載があり，唐代の李白の詩「古風」にも「蟾蜍が太空に登って天宮の月を蝕んでしまう。そのため，まろやかな月は光を欠き，ついにその光を失ってしまう。」とある。

これらの文献資料はすべて，古代中国に確実に存在したところの月と関連する蟾蜍信仰を物語っている。

蟾蜍と月との関連は非常に古い時代に生じている。

中国長沙の馬王堆１号漢墓（紀元前186年後１～２年）出土の帛画にも，月の文様の上に一匹の大きな蟾蜍と一匹の小さな兎が書かれている。蟾蜍と兎と月との三者の関係について，日本のある学者は，中国における蟾蜍と月との関係は比較的新しく発生したものであり，また月の中に兎がいるという考え方は外来のものではないか，と言っている[3]。しかしながら，蟾蜍が月の象徴とされたのは，兎が月の中にいるという考え方よりずっと古いものである。『楚辞，天問』に，「月には何の力があって死んではまた生まれるのか顧菟は何のよいことがあって月の腹の中にいるのか」とある。「顧菟」とのみ言って「兎」とは言っていない。

王逸は「楚辞」の注として，「月の中に菟あり，というが，一体何のために月の腹に居て利を望んでいるのか。菟は兎とも書く。」と言っている。これは誠に字面だけの解釈であるが，大胆に「顧菟」を「菟」とし，「菟」を「兎」と同じだと言っている。しかしながら，「顧菟」は実は蟾蜍を指し，蟾蜍の発音が変化したものである。この点は中国の学者，聞一多先生が「天問釈天」の一文に音韻学上の十一個の証拠をあげて証明しており，非常に有力な説である[4]。

中国の仰韶文化の中にも蟾蜍紋の形象が存在する。日本の縄文文化と大体同じ時期の中国の文化は仰韶文化である。仰韶文化に属する河南省廟底溝遺跡の中に赤い土器に黒彩で描かれた蟾蜍の絵がある[5]。

その形は体は円形であり，円形の体を二本の線で分けて二つの半円形を形成し，その二本の線の両側には十個の丸い斑点が残っている。頭部は新月状に作られている。肢体は土器が欠けているため，わずかに前足二本と後足一本が見られる。

そのほかに蟾蜍紋はその文化の半坡類型の陝西省姜寨遺跡にも見られる。甘粛仰韶文化と称される馬家窯文化及びその文化層の上に斉家文化の文化層中からも蟾蜍紋が出土しており，これら蟾蜍の形象は概して黒彩画で，縄文文化の浮彫蛙紋と同工異曲である[6]。

このほかに，山西省万泉県荆村出土の仰韶文化の斂口土盆の残片の外側に錐で彫った蟾蜍紋が見られる。その形は廟底溝遺跡出土の蟾蜍紋と非常によく似ている[7]。

半坡，姜寨等の遺跡にはまた彫塑の蛙が見られる[8]。

錐刺蟾蜍紋と彫塑蛙形の出現は，当時中国の先住民がすでに異なる手法で蛙の形を表現していたことを物語っている。

仰韶文化と縄文文化土器の上の異なる芸術手法による蟾蜍（蛙）紋は，両者の間にもし伝承関係があるとすれば，この錐で刺し彫った蟾蜍紋はその間接形式であろうと思われる。

中国仰韶文化における蟾蜍（蛙）紋は月の意味を持っているかどうか。これは疑問の余地はない。蟾蜍紋と一緒に出土した三本足の鳥はいる[9]。それは明かに太陽を象徴するものである。

「淮南個，精神訓」の「日の中に踆鳥あり」，また高誘の注「踆は蹲なり，即ち三本足の烏なり」，漢の王充の「論衡」の中の「日の中に三本足の烏があり」の記載からも「月の中に蟾蜍あり」と相対していることがわかる。

昔から，日の中に三本足の烏あるとの伝説があり，蟾蜍紋と三本足烏紋が一緒に現れていることは，すでに当時の人々が蟾蜍（月）と三足烏（日）の対立によって，日月二元の世界観体系を形成していたことがわかる。

今から5500-6000年前の仰韶文化については，中国の正史に記載されている。当時の人々は，ただ二元の対立世界観の体系を持っていただけでなく，社会の組織形態においても一種の二元対立の氏族組織を実行していたのである。

『史記』の記載によれば，中国の始祖は黄帝であり，その子孫は多かったが，名を得た者は二人，即ち昌意と玄囂で，のちにそれぞれ天下を治めた。

この二人が存在したということは実際はそれぞれ蟾蜍と三足烏を象徴とする二つの族団が存在していたことであり，族団とは民族学的に言えば胞族組織である。昌意は即ち蟾蜍の訛音である。上古は文字がなく，後世においても字は音からできたものであり，字は無定字である。この故に，中国古代においても字は音からできたものであり，字は無定字である。この故に，中国古代においては音の近い字はこの意味の通りである[10]。「史記，五帝本紀」によれば，昌意の子は顓頊であり，この二つの字の意味はこれまで不明であるが，実の所，蟾蜍の発音の訛りであり，「説文」の言うところの「岧岧貌」即ち蟾蜍の形状を現しているものである。曹植の「帝顓頊賛」によれば，明らかに顓頊は「月を持って号」としていたのであって，昌意，顓頊の一族は当時月を崇拝する一族であったことがわかる。玄囂，即ち少昊であり，『左伝』には「鳳鳥適至，故紀於鳥」者である。鳳は日の象徴である[11]。

史記等によれば，太陽と三足烏を象徴とする一

族は後に東に向って発展し，山東半島一帯に達し，その後，主に周辺へ向って展開した[12]。一緒に来た者の中には蟾蜍（月）信仰の一族にわかれたものもあった。

一方，蟾蜍（月）を象徴とする一族は主に西に向って展開し，甘粛，青海地方に達した。

これらの記載は考古学上の発見と合致する。考古学上，仰韶文化廟底諸類型は西に向かって発展し，甘粛，青海地区に到達し，甘粛仰韶文化，別名馬家窯文化を形成したが，その文化は月信仰の性質を十分に表現している。多くの蟾蜍紋及びその変形以外に，また複雑，美麗な彩陶紋の飾りがあるが，その殆どが月信仰内容を持っている。

さらに古い文献，例えば『山海経』によれば，月の信仰は非常に古い時代からのことであって，中国古代の太陽（三足烏）信仰の一族は月信仰の一族から分かれてできたものである。言い換えれば，古代中国では先に月信仰が出現し，その後に太陽信仰が出現したものであって，このことは十九世紀末ドイツの人類学者の理論にも明らかに符合する。

ドイツの民族学者レオ・フロベニウス（Frobenia. L）の理論によれば，狩猟及び低級農耕社会においては生と死への関心は月信仰として存在した。月信仰は太陽信仰に先行したものである[13]。この仮説は，かつて，中亜古代社会の実情から実証された。中国において月信仰は太陽信仰よりも早く，太陽信仰は月信仰からわかれたという事実もこの理論を一歩推し進めるものである。

中国考古学文化の中で，仰韶文化廟底溝類型に先行するのは半坡類型文化であることは地層学上，年代学上からも証拠がある。半坡類型彩陶文様の主要なものは魚である。これは古代伝説中の「鯀」一族の文化ではないだろうか。「鯀」は魚から出たものの意である。「孫」が子から出たものと同じである。魚を標識とする一族の文化は比較的単純な月文化であった[14]。『山海経・海内経』によれば，「大洪水が起きた時，鯀は帝の土を盗んでその土で洪水を止めた。帝の命を待たなかった故に，帝は祝融に命じて鯀を羽郊で殺させた。しかし，鯀は禹となって生きかえったので，帝は禹に命じて布土して九州を定めた。」鯀の一族は歴史から消えた，或は羽郊に逃げて禹の一族となったともいう。半坡類型の後は月信仰と太陽信仰が共存する廟底溝類型の文化期に入ったが，この時から，蟾蜍一族が月信仰の主要な代表となり，『史記』にあるように，天下を治める赫赫としていた二族のうちの一つになった。

二

ところで，日本の縄文土器にみえる蛙の文様は中国から伝来したとも考えられる。もし月信仰が世界に普遍的に存在するとすれば，しかし史料によると蟾蜍と月との結合は中国古代の月信仰の時代において中国の黄河流域の昌意一族の特徴である。蟾蜍（蛙）はこのような意義を持つので，その伝播は単に宗教意識の伝播，影響からだけ考えることはできない，集団の移動と関係しているものである。日本の縄文文化の中にも蛙紋のほかにも多くの月信仰の痕跡が見られるが，当時の日本の月信仰も蛙と関係があることが示唆される[15]。このことは，当時の日本と中国がなんらかの文化連係や民族の移動があったことを物語っているのではないだろうか。多くの例証については以後に論述する。わずかに言語学上の一つの例証から見ても，日本語では「蛙」を「かえる」という一種の称謂があるが，これは「帰る」と同音である。「死而復蘇」「劫而復帰」が月の自然現象の反映である。

縄文中期，月を象徴する蛙の模様は中国大陸から伝えられた。その前後の関係についていえば，蛙紋は仰韶文化に於けるそれはかなり写実的，稚拙，古朴なものであるが，縄文土器の蛙紋はかなり円熟，老練，かつ抽象変形したものとなっている。このことは，これらを造った個人の技芸にも関係するけれども，その内包，形態から明らかに時代の発展と技術の進歩をみてとれる。仰韶文化の簡単な蛙紋が，当時の朦朧とした原始信仰と単純な芸術的風格を表現しているといるならば，縄文土器の蛙紋の精致かつ抽象的な浮き彫りは縄文

時代の充実した宗教信仰と芸術的円熟を示していると言える。このような芸術形式の相違は時代の前後関係を現している。縄文文化の土器の蛙紋は馬家窯文化の蛙紋の表現形式に接近しており，抽象的，変形的，円熟した技術を示している。単に陶器の上だけでなく，その文化の他の点においても月信仰の内容が表現されているので，この点は縄文中期及びその後の状況においても全く同様である。

縄文中期頃に蛙（月）文化が日本へ伝来したらしいことは考古学上の細密な考証，比較以外にも日本の史料や伝説にも記録されている。矮姫の故事等もこのことを説明している。

矮姫（さひめ），一名狭姫，身体の矮小を特徴とする。母は大食之姫，保食神とも大宜都比売ともいわれ，五穀の神，豊穣の神である。矮姫の母が殺され，赤雁に乗って五穀の種を携えて西から東へ向かって飛んできた。これが日本の農業の始まりである[16]。矮姫の故事は蛙の一族が日本列島に渡来することに関わる。矮姫という名前の由来はその身体の矮小のことからである。蛙の形は「状似小児」と言われる。矮の発音はまた「ワイ」と言う。その音は漢語の中の蛙と同音で，矮姫は実に，月信仰の蛙族の伝説である。また赤雁は日を意味する，太陽信仰一族の象徴なのである。大食姫が殺されたことは前述の鯀が祝融に殺されたことに相応する。鯀は中国古代伝説中における早期農業を発生した神である。『天問』が鯀について言っている。「咸播秬黍，莆雚是営」と，『古事記』，『日本書紀』に保食神は月の神に殺された記載がある。『古事記』の中に，保食神に相当するものは大気都比売と言われ，速須佐男命に殺された。三貴子の中にすでに月神があるが，しかしながら実際には速須佐男命にも月神の性質がみられる。この点は，ネリー・ナウマンがすでに示したところである[17]。祝融は即ち月神であり，その世系からは昌意，顓頊の月族がでた。また，祝融は火神の性格も持つ。『山海経・海外南経』の「南方祝融」，郭璞の注に「火神なり」とあり，『左伝』昭公二九年に「火正は祝融なり」とある。『史記・楚世家』は次のような歴史を記載している。

「楚の先祖は，帝顓頊高陽より出づ。高陽は黄帝の孫にして，昌意の子なり。高陽，稱を生む，稱，卷章を生む。卷章，重黎を生む。重黎は帝嚳高辛の為に，火正に居り，甚だ功有り，能く天下に光融す。帝嚳命けて祝融と言ふ。共工氏，亂を作すや，帝嚳は重黎をして之を誅して尽くさず其の弟呉回を以て重黎の後と為す。復た火正は居り，祝融と為る。」

この中で「重黎」とは即ち祝融であり，帝嚳とは日族のことであり，共工氏は即ち鯀である。「共工(gonggong)」と鯀(gun)」は一語の転となる[18]。鯀も祝融に殺された。祝融が共工を誅して尽くさずために帝嚳に誅されたということは，即ち日の神に殺されたということである。このことは『古事記』，『日本書紀』の伊邪那美（伊奘冉尊）が火の神を生んだ時に死に（即ち火の神に殺された），火の神は太陽の神に殺されたという故事と同じである[19]。火の神が殺された一件はまた後で述べる。ここで指摘出来ることは，記紀の中の伊邪那美（伊奘冉尊）が火の神を生んで死んだという物語は月の神が保食神を殺したという物語と同じであって，すべて，祝融が鯀を殺したという物語の変形であって，一つの歴史事実で別の物語に作り替えられているのである。鯀，矮姫，保食神は月神に殺される，伊邪那美は火神を生むといった物語について，次のような対応関係をある‥

伊邪那岐(日神)=	嚳(日神)	=	天照大神	
⋮	⋮		⋮	
火神	=祝融(火神，月神)=		月神(須佐之男命)=	矮姫
⋮	⋮		⋮	⋮
伊邪那美	=鯀(共工，農業神)=		保食神	=大食姫

これらの物語は一つ物語の変形とも言える。鯀の物語の中に「鯀は生き返って禹となった。」ということがあるが，禹は実は祝融一族であり，また蟾蜍一族であり，即ち火の神である。禹が鯀から生まれたということは，火の神が伊邪那美から生まれたことと同じであり，また，矮姫が大食姫から生まれたということであり，矮姫は火の神即ち

月の神である。即ち素戔嗚尊である。

『三瓶山の史話』等によれば，矮姫はソシモリ（朝鮮）から飛来したものである[20]。考古学文化の仰韶文化半坡類型の影響は当時すでに欧亜大陸の極東地域にも及んでおり[21]，廟底溝類型の文化も日本に伝来しているが，その文化の担手は朝鮮を経由して来た可能性が甚だ大きい。『三国遺事』東扶余，高句麗条，及び李奎報著『東明王篇』から引用の『旧三国史』の逸文によれば，朝鮮（高句麗）王家の始祖と建国の神話は蛙と関係があるとしている。

「東扶余の夫婁王は，子息に恵まれないので，子が授かるようにと山川に祈っていた。ある日，お祈りからの帰路，鯤淵にさしかかったとき，夫婁王が乗っていた馬がおおきな石の前で涙を流すのであった。王は不思議におもい，臣下に命じて，その石を働かした。すると，そこに金色にかがやく蛙の形をした男の子がいるのであった。その男の子をみた王は，天が授けてくださったとたいへん嬉んで，王宮に連れて戻り，大事に育て，金の蛙にちなんで金蛙と名づけた。」「夫婁は亡くなり，金蛙が王位を嗣いだ。あるとき金蛙は太伯山の南にある優渤水のほとりで一人の女に出遇いその名を問うたところ，わたしは河伯の女で名は柳花というものです。妹たちとそとへ遊びにでました，ある日のこと，みずから天帝の子で解慕と名のる一人の男子にあいましたが，その人がわたしを熊神山のふもとで鴨緑江のほとりのある室に誘い入れそこで二人は知りあったのでございますが，そのあとその男子はどこかへ往ってしまったまま帰ってはまいりません。父母はわたしが仲人もなくその人に従ったことを責め，その咎としてこんな遠いところへ流されてしまったのでございますと訴えた。金蛙は不思議におもい，この女を室の中に押しこめておいたが，陽の光がさしこむと女は身をひいてそれを避けていた。しかし陽の光は追いかけるように柳花の身を照した。このために柳花は妊し，やがて朱蒙が誕生した。」

その中で，「金蛙」は月の族であることを示す。柳花は金蛙の宮殿の室に幽閉された日の光を受けて妊娠し，朱蒙が生んだことが日の族と月の族婚姻の物語になるのである。

上の物語の中，解慕漱（xiemushu）という名は非常に意味がある。解慕の音は蝦蟆（xiama）に近い。古漢語の中で声母或は韻母が同じであれば，双声または畳韻といわれる，通用と仮借ができる。『契円古伝』により，「初め五原に先住の種あり。没皮，龍革は北原に牧し，魚目，姑腹は西原に穴し，熊耳，黄眉は中原に棲み，苗，蘿，孟馮は南原に田し，菟首，狼裾は海原に舟す。皆よく帰順す。ただ南原の箔箘籍は兇狠にして至らず。神祖伐って，これを海に放つ。（中略）。箔箘籍は三邦の名にして，鳥人，枯盟舒の族なり。巨鐘をみだし，遂に辰藩に入る者はその遺孽という」その中に，「箔箘籍」は一説即ち朝鮮の朴，金，昔三氏である。「枯盟舒（kumingshu）」は解慕漱との音は近い。鳥人，枯盟舒は実に日族と月族を指すであろう。鳥は日の象徴である，鳥人は鳥羽などで飾って鳥（日）を象徴とする一族であろうが，枯盟舒の意味は蝦蟆であろう，月の象徴である。

『古事記』中，「天之日矛」の伝説は前記の物語と相似するし，また直接日本とも関係する。『三国遺事』巻一，日月の精延烏郎と細烏女の物語は，夫婦が日本に渡り，そのとき新羅では日月が光を失った。同じ日，月二族の古い伝説であろう。このほか，王倹朝鮮の檀君の物語の檀（tan）は蟾（chan）に音通するものであり，中国月信仰の周人の祖先である亶父は実に即ちこれである。熊が虎と戦う物語は『漢旧儀』によれば，月族の顓頊は三人の子があり，一人が江水に住んで虎になるとあるので，この物語も月と関係する。虎はまた「李父」という名がある。朱蒙の三人の友人の中の一人は陜父と言う。陜父（shanfu），亶父（danfu）と李父（lifu）と言い，蟾蜍はまた「田父（tiantu）」と言う（『本草綱目』より）。田は亶と陜との発音が近い，その母音が同じである，「畳韻」というので，その義は通ることができる。檀君故事とは『三国史記』によれば，「桓因の庶子の桓雄は，天下を治めようと志し，父桓因は，このような桓雄の意図を知り，桓雄を下界

に降ろして三危太伯に合わせ，人の世を治めさせようとした。桓雄は部下三千人を率いて太伯山にある神檀樹のもとに降って来た。」三危とは，「遷北三苗於三危」の「三危」の訳であり，月族の居地である。そこから朝鮮，日本に遷来した居民は，『日本書紀』，『姓氏録』などにより，応神天皇の時に弓月君率百廿七県県民帰化，これはとても重要な史料であるが，しかし『姓氏録』の弓月君は秦の始皇帝の後裔だというのは信じがたいと思う。それは恐らく最も古い移住の歴史事実を反映しているかも知れない。応神天皇と神功皇后は母子神として氏族時代の事を反映している[22]。反映するのは氏族社会の日信仰の一族が月族の中から分裂したという事実である。氏族社会の時，月信仰の一族が中国から遷来したという説は歴史の事実に合うと思う。『記』では「秦造の祖」という事しか言っていない。秦人は月族の「高陽」より出るものなので，『姓氏録』に「秦の始皇帝」は秦の始祖と見なすわけである。

『三国史記』巻一「新羅本記」の記載によれば，その始祖は赫居（heju）と称し，これは中国人の祖先である赫胥（hexu）と関係する。赫胥は即ち伏羲であり，その実は「蟾蜍」の音の変化である。その発音は変化して盤古または槃瓠となった。『三国史記』によれば赫居の世に瓠公という人がいて，もとは倭人であり，浮海して来た朴氏の祖先となった。これらのことから，月信仰は日本と朝鮮半島の交流史上にも証拠が残されているのである。

対馬と朝鮮半島と日本本土は矢の届く近さにある。『魏志・倭人伝』によれば，その島が食糧不足で毎年「船で南北に交易に出ていた。」とある。当時の交流が頻繁であったことがわかる。日本の正史によれば，古代日本と朝鮮半島との間の貢納往来ないし戦争は相当頻繁だった。『漢書』によれば，日本は毎年楽浪郡に人をやり献見した。先秦の古籍『山海経』の中に「倭」と「毛人」の記載がある。これらはすべて，古代における日本と朝鮮と中国の交流が非常に広範に行われ，月（蛙）文化の伝播もこの路線によって行われたことは間違いない。

月神は壱伎県主等の祖とある。『日本書紀』によると顕宗天皇の命を受けて阿閉臣事代が任那に赴いたとき月神が人に憑いて，自分を祀るように，と託宣したとある。そして壱伎に月神を祠ることがあった。任那に行って月の神に会うということは日本と朝鮮の月信仰が深い歴史の淵源を示すものである。朝鮮半島南端に当時は月支（月氏）という国名の国あり，『三国遺事』により，渡海してきた瓠公は「月城」に住むある。月信仰と関係がある。また古代の壱岐等の地域には確実に月信仰があったのである。

しかし，指摘すべきは新羅，伽羅は日本が朝鮮半島に置いた植民地であった，或は，日本の文化を受容し建立した国家であったということである。朝鮮半島の南端における月（蛙）信仰は逆に動いたのであり，即ち，日本から朝鮮へ輸入された可能性もある。

『三国史記』によれば，瓠公という人が，もと倭人であり，浮海して来た。また，例えば前引の『契円古伝』中に，南原の箔箘籍は兇狠にして至らず，神祖伐って，これを海に放つ。後に海過経て，灘波を踏み，遂に辰藩に入る。明らかに南原から海に経て，朝鮮に入る。再び，天の日矛物語の中に，「その玉を將ち来て，床の辺に置けば，即ち美麗しき嬢子に化りき，仍りて婚ひして嫡妻としき。ここにその嬢子，常に種種の珍味を設けて，恒にその夫に食はしめき。故，この国主の子，心奢りて妻を詈るに，その女人の言ひけく，凡そ吾は，汝の妻となるべき女にあらず。吾が祖の国に行かむといひて，すなわち竊かに小船に乗りて逃げ渡り来て，難波に留まりき。」彼女の祖の国は日本でありまた脱解王は東海の竜城から箱船に載せられて新羅の海岸に漂到した。それなどによって，朝鮮半島南端の月（蛙）文化の受容は日本から来た可能性もある。日本の最も早い月（蛙）信仰は南方から入って来た可能性が大きい。中国内陸から来た月族の移動は朝鮮半島を経る陸路より南部の海路の方が早いかもしれない。

三

南方からの道について言えば，沖縄などの南西諸島の島々を経由して日本と関連する可能性は確実にある。柳田国男『海上の道』の論点は説得力がある（柳田国男，1952）[23]。『論衡』により，「周の成王時，会稽に倭人が来た。」南部の海路に経ったわけである。考古学，民族学上の証拠以外にも，沖縄から九州までの神話，伝説，昔話ないし風俗，信仰の共通性からも証明できる[24]。九州地方等における蛙と餅と月と関係する物語も，蛙と月との関係を照明できる[25]。中国では八月十五日と正月十五日の満月の夜に，月餅やお餅を食べる習俗が広く存在する。餅を月の象徴とするものであって，月を祭る伝統は非常に古いものである。それは月族と農業の伝播との間にも関係がある。南島における綱引と拝月の習俗もそこに月信仰伝統を語っている[26]。

また，『瀬戸内町誌』の中「奄美大島の伝説」によれば，「ナンコク（南国）からアマシュサマがヒリ（兄弟）と一緒に来た。オーロッコ（鴨緑江），朝鮮から出雲の国へと飛んで来た。そこも乱れていたので，アマシュサマはイヤンヤ（岩屋）に入り，世の中は七日間は暗闇になった。アマシュサマを踊りや相撲等で外へ，タカチホサマが出し，世の中を明るくした。その時，神を連れてきたタカチホサマが木を持ってきて，茅を曲げると家ができた。家の始まりである。この日を祝ったのが八月十五日の夜である。日本は，まだ固まらず浮いていた。」[27]。これはおそらく日月二族の移住の物語であって，二族は南方から来たものと思われる。

このほか，例えば『徳之島の昔話』中に「世したてたん話」ような物語がある。物語の中で，三人の兄弟はそれぞれ唐の国と那覇に，大和に国を建てるという建国の関係があるようだ[28]。

岡正雄氏によれば，日本縄文中期の文化は南洋（メラネシア，ニューギニア）原住民文化から伝来したところの一種の母権的，秘密結社的，芋栽培ー狩猟民文化であるとされている[27]。

メラネシア等の原住民文化は確かに蛙紋を持つ日本の縄文文化と密接に関連しており，メラネシアにはひきかえる（蟾蜍）と月が関連している神話がある。

「二人の大酋長が，幽霊山に於ての青年式に当たって，お互いに義兄弟のちぎりを結ぶための祭宴を催した。すべての鳥が祭宴にやってき，ククケもヒキカエルも出発した。ヒキカエルは槍と二本の棍棒を持ってゆき，その姿で祭宴の場に現れた。ヒキカエルは他の者たちのなかに入らないで，森の端の近くの開墾地の境界にひとり離れていた。ヒキカエルは槍をつっかえ棒にして，片足を揚げ，二本の棍棒を肩にして立っていた。酋長たちの息子たちも出席していたが，彼らは飾帯や腕輪をつけ，また腕輪には良い香りの葉，貝殻などをつけていた。

犬もそこにいたが，おしゃれをしていた。ヒキカエルはみんながそんなにきれいに飾っているのを見て，悔しさの余り死んでしまった。その後他の者たちも死んだので，そこで死がこの世に出現した。しかしこのヒキカエルは月の中の寝室からやってきたものだった。月にある男の家のコギトゥク酋長はヒキカエルの息子である。彼もまたヒキカエル氏族に属している。ヒキカエルが暁の明星として天に現れるときにいつも死者が火葬されるのである[30]。」

この神話はメラネシアのブーゲンビル島南端のブイン族のものであるが，日本の古代文化が南方から直接に伝来したものかどうかは研究すべき問題である。岡氏はこう考える，「この文化は，古来東南アジア大陸のどこからか南海に流入したものと思われるが，おそらく，この文化の一分流が南シナを経て，日本列島へも渡来したものであろう」。この文化の原点がどこにあるのだろうか。私はそれは黄河流域であり，その源流は中華民族の文化の源と同じくすることができると考える。前述の通り，月中に蟾蜍ありとの伝説はその起源が黄河流域にあるが，盤古（即ち蟾蜍）神話として南洋の島島に広範に分布していることは伝播したことの可能性を証明するものである。前述のように，史書によれば，中国の歴史において，月族

から出た祝融が共工（鯀）を誅したが尽くさず，帝嚳は更に祝融を誅したが，この戦争は非常に残酷なもので，月族は日族に対して「九日を射て，一日を留める」，日族は月族に対して完全に誅を加えた「九隅には余すところない」とある。戦争は月族の敗北で終えた。戦争後北の三苗は三危（甘粛）に移り，南の三苗は「南海に反逆して進入した」（『山海経』郭璞注）。三苗は即ち蟾蜍であり，蛙を指す。中国の青海，甘粛地区の馬家窯文化は北三苗が三危に遺した文化遺跡である。そして，南海へ移した南三苗は南洋諸島の月信仰の文化伝統と関係があるのではないかと思われる。日本の正史に記載されているところの日の神が火の神を殺すという物語は，この歴史段階にたいする日本民族の記憶によるものである。日本の古代の蛙（月）文化はこの戦争の後の移住と関係があるのかも知れない。日本文化の中には南洋群島や中国南方にすむ少数民族の持つ特長と同じ文化の構成要素を示すものがある。この故に，私は日本の縄文中期文化の新要素は中国中部の文化，即ち仰韶文化廟底溝類型を直接に受け継いだものと考えている。

蛙紋の集中の地域は関東一帯である。関東一帯の蛙信仰の文化は突然発達したことが明らかであるが，それは海上から直接伝えられた可能性が大きい。蛙（月）信仰の一族の一部が南西諸島を経由して直接伊豆諸島などに達し，それから北上して東京湾一帯に上陸した可能性もある。八丈島の丹娜母子の物語もこの史実のほかの伝説の形式わけである。「その昔，八丈島に大津波が起こり，一人の妊婦だけが舟の艪にすがりついていて助かった。後に一人の男の子を産み，女はその男の子と母子交合して子孫を繁栄させた。」[31]。丹娜の発音は支那と近い，その語源は支那（CHINA）と同じ「蟾蜍」わけである。その母子の物語は日族が月族から生まれた。その後二族通婚していたことだと思う。その伝説が前述の伝播路線の可能性を証明した。月蛙信仰の一族は関東一帯に月蛙文化区を建立した。その後，段々西に発展した。これは考古学の上の縄文前期は東日本に発達したが後期に西日本へ伝播するのと符合する。筑波山のガマ祭り及び富士山と関連する月世界から来た赫奕伝説などもそこの月信仰淵源の一つの証明であると思う。

これによって，月蛙文化の伝播経路が一つだけではないことがわかった。

四

『魏略』逸文は倭人に言及して言っている「その旧語を聞いたら，自ら太伯の後裔であるという」と。『晋書』倭人伝及び『梁書』倭伝も同じようなことを載せている。「太伯」は周太王の長子と伝えられ，太伯はその幼子を王にせんとして，太伯と弟の仲雍と一緒に江南に避けて呉の地の長とした。この話は非常に古い事実に由来する。月族の南移と関わり，周は月族の出身であって，周とは月の四分の一の意味である。幼子が王となったということは即ち，月族から分裂して，出来た新興の日族の勢力が強大になり，権力を握ったということである。古い月族は圧迫され，その人格化的代表である太伯と仲雍は呉の地に退いたということである。「太伯」は月族の中の長者を意味し，蟾蜍一族を指す。太伯は大伯であり，伯父（おじ）の意である。筑前の竈門山（宝満山の姫神は八幡神の伯母であるが，「竈門」はかまどと読み，即ち「蝦蟆」である。竈字の黽は即ち蝦蟆から来ている。このことは古い竈（火）神が月（蛙）信仰から出ているからである。竈門山の姫神は女性であるから伯母とされる。日族から見れば，月族は人格化すれば太伯となる。この点は太伯がかま（蝦蟆）月族を指すことから証明できる。『常陸国風土記』の小蛇が雷で伯父を震殺したという物語も古い時代の日，月二族の闘争の物語によるものである。これらから考えると倭人が太伯の裔というのは決して虚言ではない。事実上，日本の文献史料と口頭の伝承の中で，この時代のことに関する資料は相当豊富である。紙幅の都合で，この問題については別の機会に論じてみたい。

以上のことから，縄文文化の中期の時代から，月信仰の集団とその文化の到来が，日本の民族の

構成及び政治，経済，文化などの発生に大きな作用と影響を与えたのではないかと推される。これは日本文明史の原点になりはしないかと考えられないだろうか。

1）例えば，長野県井戸尻の三本指蛙形文様の土器『考古学雑誌』48：1963. 武藤雄六文の口絵；東京都出土の三本指動物文様深鉢。Kidder, J. Eduward, jr., 1968. Prehistoric Japanese Arts. Jomon pottery. With contributions by Teruya Esaka Tokyo. 図138。

2）ネリー・ナウマン：「縄文時代の若干の宗教的観念について」『民族学研究』39/4，1975.

3）出石誠彦：『支那神話伝説の研究』中央公論社，1973年。

4）『聞一多全集』第二巻，三聯出版社，1982年8月。

5）中国科学院考古学研究所『廟底溝与三里橋』科学出版社，1959年。

6）姜寨出土の蟾蜍紋見「1972年春臨潼姜寨遺址発掘簡報」『考古』1973年第三期。馬家窯文化の蛙紋，厳文明「甘粛彩陶的源流」，『文物』1978年第10期。

7）厳文明「甘粛彩陶的源流」『文物』1978年第10期。

8）中国科学院考古学研究所『西安半坡』文物出版社，1963年。

9）同注5。

10）「古人重視音，不重視字，多用通仮字」というのは中国清代学の古代史研究の一大成果である。清焦循の『易注』により「古者命名弁物，近其声則通其義」と言う。

11）劉夫徳：「従我国古代的日月崇拝看華夏族」『中南民族学院学報』1984年4期。

12）『史記』に「玄囂降居江水」といい，此江水は現在山東省西南部にあたる。劉夫徳：「扶桑考」『社会科学戦線』1985年3期。

13）大林太良：「フロベニウスの理論」，蒲生正男：『現代文化人類学のエッセンス』ベリカン社，1978年。

14）劉夫徳：「仰韶文化魚紋，人面魚紋含義的再探討」『青海社会科学』1986年3期。

15）蛇，火焔文様及び仮面なども月信仰の意味があるが，これについては著者が別に論じるつもりである。

16）「穀物の神・魏姫」，酒井董美他『日本伝説大系』第十一巻，みずうみ書房，昭和59年6月。

17）ネリー・ナウマン「哭きいさちる神スサノオー生と死の日本神話像」言叢社。1989年10月。

18）鉄井慶紀「鯀と共工の神話」『哲学』（広島哲学会）19。『中国関係論説資料』第8号（1967年7月－12月）第一分冊（哲学・宗教）により。

19）イザナギは日神の意味がある。松前健：『日本神話の新研究』，南雲堂桜楓社，昭和35年8月。

20）同注16。

21）中村嘉男「半坡類型の影響」『考古学雑誌』1972年5期。

22）「桃太郎の母」『石田英一郎全集』第五巻，筑摩書房，昭和44年。

23）「海上の道」『定本柳田国男集』第一巻，筑摩書房，昭和44年。

24）イザナギ，イザナミ二神や，天照大神の神話，抜歯，文身，洗骨葬，妻訪婚などの風俗，綱引拝月などの行事，言語や体質にも，その相互の関係は多い。

25）関敬吾「日本昔話大成」第一巻，P108以下参見。角川書店，昭和54年5月。

26）小野重朗『十五夜綱引の研究』慶友社，1972年。

27）荒木博之他『日本伝説大系』第十四巻，みずうみ書房，昭和60年。

28）山下欣一他『日本伝説大系』第十五巻，みずうみ書房，平成元年。

29）岡正雄「日本民族文化の形成」『図説日本文化史大系』第一巻，小学館，昭和31年。

30）大林太良：『神話学入門』，中央公論社，1966年。

31）「女護ケ島」，大嶋善孝他：『日本伝説大系』第五巻，みずうみ書房，昭和61年。